

特別な支援が必要な児童への対応

～楽しみながら、無理をせず、気長に～

学校からの温かい配慮の下で行われる、
特別支援が必要な児童への適切な支援活動



八戸市立旭ヶ丘小学校

この取組を紹介したわけ

八戸市立旭ヶ丘小学校は、八戸市の郊外に位置する大きな住宅地域にあり、全校児童数520人ほどの学校です。大規模な県営住宅や豊かな緑に囲まれた閑静な地域です。八戸市では平成13年度から「八戸市教育支援ボランティアセンター」を設立し、地域の方を学校教育や社会教育に活用するため、「教育支援ボランティア人材バンク」を設置しています。旭ヶ丘小学校では、この制度を主に活用しながら、特別な支援を必要としている子どもたちをサポートする体制を整備してきました。

発達障害のある児童へはもちろんのこと、学習遅滞傾向のある児童への支援においても、退職教員ボランティアとの工夫ある連携を通じて、子どもたちの確かな成長につなげています。

このような活動です(ボランティアTさんとSBさんの個別支援)

平成19年度、旭ヶ丘小学校の高学年に高機能広汎性発達障害の児童が、中学年にA D H D の児童がいたそうです。パニックを起こすことのあるこの児童たちに、安全面を確保したりクールダウンの時間を確保したりするために、担任だけでなく全職員での対応を行ってきましたが、対応できる人的な増員が望まれていました。

そこで、八戸市教育支援ボランティアセンターに仲介を依頼し、TさんとSBさんの紹介を受けたそうです。最初にコーディネーターのNさんとボランティアのTさんとSBさん、校長先生、教頭先生で顔合わせ会が8月中旬に学校の校長室で行われました。

(ちなみにコーディネーターのNさんは、コーディネートシートにその時の内容を記録することも行っているそうです。)

こうして、TさんとSBさんは中学年の支援を行うことがきまったそうです。(高学年へは八戸市教育委員会で実施している「特別支援教育アシスト事業」より加配を受けた養護学校に勤務した経験のある特別支援アシスタント1名により対応できることになりました。)



～学校からのボランティアの方への配慮～

TさんやS Bさんは特別な支援を必要とする児童に対して、特別な経験も知識も持ち合わせていなかったので、最初のうちは教職員から具体的なレクチャーの時間を設けたそうです。時には乱暴な言葉を発することもある、そんな子の特徴を、ボランティアの方に付き添いながら伝えることを大切にしました。

「ぼーっとしているときは、声をかけてください・・・。」

「パニックになっているときは、クールダウンの時間をとります。とり方は子どもによつて違います。トイレにいくと収まる子やボール遊びをすると収まる子がいます。」

「とんとん肩をたたいて、本人の気づきを支えてください・・・。」

このような子どもとの接し方や向き合い方などは主に教頭先生が、個人のプライバシーの守秘等については校長先生がお話をされました。

TさんやS Bさんは、学校に来ると、自分の名前のついてある下足箱を使用します。そして、職員室に入り自分の名札を返すそうです。教頭先生は、一日のうちに一回は必ずお会いして、たとえ1~2分でも話をかけるようにしています。それは、ボランティアの方々には職員室や教室での居場所があるかどうかの不安や（だれに話してよいかわからない・・）などの不満やストレスがあるからです。

ですからちょっとした時間でも会話をすることで安心感をもってもらうこと、そして子どもたちのために役立っていることへの満足感をもってもらうことに心がけているということでした。

S Bさんはご自身のボランティア活動について、平成20年7月に八戸市教育ボランティア養成講座で事例発表されました。その際の発表概要は次のとおりです。

(教育支援ボランティアセンター 発行「どりーむ」第12号より抜粋)

(略) S Bさんからは、対応している子どもがなかなか活動に入れないと「クールダウン（落ち着かせること）」について興味深いお話をありました。

クールダウンの例としてキャッチボールなどが知られていますが、個別に手探りでその子にあったやり方を見つけ出していくほうが効果的だということでした。

また、ルールや約束事をしっかりと伝えることによって、子どものパニックが少なくなるようです。さらに活動中の感想として、「子どもたちからのお礼のメッセージがうれしかった。」「学校からの気軽な声かけでリラックスしてできた。」などがあげられました。

それらの経験からは、「気負わず」「個々の子どもに合わせた対応を」「ボランティアとしてできる範囲内で」という姿勢が、ボランティアを続けていく上での秘訣だと思われました。(以下、略)



三八地区

このような活動です(ボランティアYさんとTDさんの学習相談)

YさんとTDさんは、小学校教員を退職された、いわば教員OBとも言える方々です。平成19年度11月より、旭ヶ丘小学校では子どもたちが自分から進んで学習できる部屋「児童学習室」を開設したいと考えました。(通称:あさひ学習室)この学習室では、学習遅滞児童や一斉学習では学習効果があまり期待できない児童を主に対象にした学習相談の場としての意義があります。

ここでのボランティアの依頼にあたっては、教育支援ボランティアセンターを通じず、本校独自で以前本校に勤務していた経験のあるお二人の先生方に打診をして了解を得たということです。

この児童学習室のことを子どもたちには、「いっしょうけんめいに勉強したい人のための教室」として説明し、学習の準備をすることと返事・挨拶・言葉遣いをしつかりすることをきまりとしています。その子にとって必要感があって保護者のご理解が得られた場合にこの部屋で学習することになるそうです。

学習室に整備された算数の教材や教科書・手作り教材等を適宜使用しながら、児童一人一人のニーズに応え、丁寧な学習支援がされています。現在9名の児童がこの児童学習室を利用していますが、特筆すべき点は、担任の先生との連絡体制がしっかりとっています。学習の記録を記すために児童一人一人のファイルを作成し、きめ細やかに指導した内容を記入することで、担任の先生や保護者と連絡を密にしています。

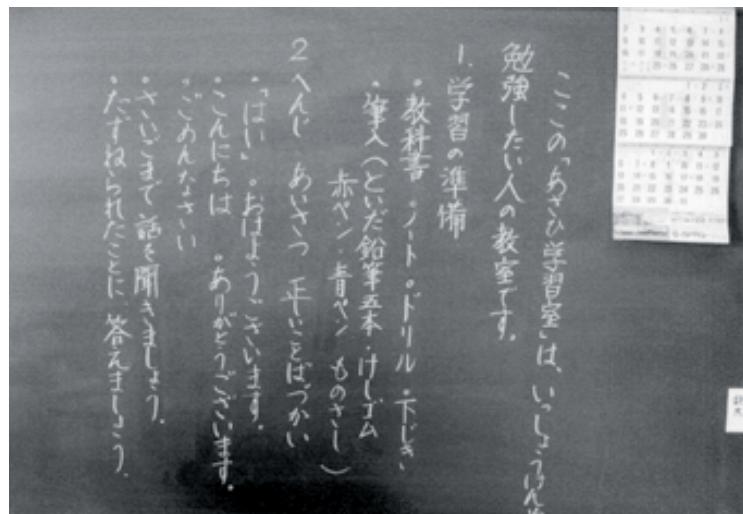
このような特別支援活動は、退職教員ならではの専門性が生かされたもので、保護者から

も「ありがたい。」という声や「子どもが生き生きしている。」「楽しいと言っている。」などの感想が寄せられています。

ボランティアのTDさんは、「この部屋は、子どもたちにとって、なまける部屋ではない。」

と、基本的な姿勢を強調しつつ、次のような感想を述べています。

「子どもが“勉強が楽しい”と言ってくれることがとても嬉しい。私は子どもが好きなので、苦と感じたことはない。子どもが喜ぶ姿を見ることが楽しいし、いつも子どもたちから元気をもらって帰っている。」



この活動を行って 成果・課題、そしてこれから

旭ヶ丘小学校では、昨年度、特別支援教育についてのお知らせ文書を7月・8月・11月上旬・11月下旬の4回もの発行を通じて、保護者の方々に周知を図っていました。校長先生はじめ、教頭先生・担任の先生方の児童一人一人を大切にしたいという熱い想いが、子どもを取り巻く多くの方々を振り動かしています。

最後に、旭ヶ丘小学校で特別支援教育のボランティア活動が、うまく機能できた理由として、教頭先生は次の3点を挙げていました。

- ①退職教員ボランティアの方々、教育支援ボランティアの方々、教育支援アシスタントの方、全員に活動意欲があったこと。
- ②学校の職員とボランティアの方々とよく話し合ったこと。
- ③お互いに記録を取り合い、それを共有できたこと。

保護者 各位

平成19年11月22日

八戸市立旭ヶ丘小学校

児童 南 戸 勝 二

特別支援教育について（お知らせ編4）

熱誠の鋭、保護者の皆様にはますますご連携のことをお喜び仰りしあがます。日頃から本校の教育にて御理解とご協力ありがとうございます。誠にありがとうございます。

特別支援教育についての実験的実践平野直（スラッシュ） 榊原先生、

先生）の講演について紹介をいたします。

近畿学習院の日開催するもの

①学者の基礎的研究、並他の自己実験を行います。

②本校に勤務していた北澤先生、白石先生と特任先生が開催に当たります。北澤先生は「基礎知識」、白石先生は「実験的実践」「近畿学習院の現状と今後の問題」、特任先生は「人権尊重をめぐる問題」と題して講義を行います。皆様、お時間ある際は、是非お聴きください。

③軽口だけでなく、音楽、絵などに取り入り、作業したりします。

④軽口だけでなく、音楽、絵などに取り組んでいます。自分で音楽、絵などに取り組んでいます。

特別支援室は、その子にとって必要なものあり、保護者のご理解や尋ねられた場合に、この

問題で回答することあります。

上記のようにお読みなされたところ、保護者の方々から質問の質問やお問い合わせがありま

る事柄は、保護者の皆様が直接お聞きなされたものですので、保護者から直接お聞きなされ

ておこなは、保護者の熱いお気持ちを読んでいただきました。また、対象児童でも面接

しにしました。お話を練習できましたので、4人の児童に入りました。

保護者質疑の回答

①学者の基礎的研究、並他の自己実験を行います。

②本校に勤務していた北澤先生、白石先生と特任先生が開催に当たります。北澤先生は「基

礎知識」、白石先生は「実験的実践」「近畿学習院の現状と今後の問題」、特任先生は「人

権尊重をめぐる問題」と題して講義を行います。皆様、お時間ある際は、是非お

聴きください。

③軽口だけでなく、音楽、絵などに取り組んでいます。自分で音楽、絵などに取り組んで

ています。

④軽口だけでなく、音楽、絵などに取り組んでいます。自分で音楽、絵などに取り組んで

います。

特別支援室は、その子にとって必要なものあり、保護者のご理解や尋ねられた場合に、この

問題で回答することあります。

上記のようにお読みなされたところ、保護者の方々から質問の質問やお問い合わせがありま

る事柄は、保護者の皆様が直接お聞きなされたものですので、保護者から直接お聞きなされ

ておこなは、保護者の熱いお気持ちを読んでいただきました。また、対象児童でも面接

しにしました。お話を練習できましたので、4人の児童に入りました。



近畿学習院の基礎
基礎知識です。
基盤や知識を上げること。
の子と保護者の保護のものと
連絡して実験を行います。
基礎知識を実験しておこなうことを
いい、自分で実験することのないよ
うに始めています。保護者も
自分が丁寧に行っています。
「やってみせ、聞いて教えて、させてみて、
自分で育てる。あひむす」

特別支援室に関する質問を頂いた場合は

お問い合わせください。Tc 23-8190



三八地区

相互信頼に基づいた学校支援

～人材リストはもはや不要？～

「国語の毛筆指導」と「総合的な学習の時間の地域学習」における継続した支援



八戸市立白銀小学校

この取組を紹介したわけ

八戸市立白銀小学校は、八戸市の東部、海近くに位置する地区にあります。昔から八戸市発展の基盤である水産業の核となる地区で、学校の校舎の窓からは青い海や魚市場・水産加工場などを見渡すことができます。

このような活気あふれる白銀地域に住んでいる優れた技能や知識をお持ちの方々を、地域の社会教育施設である白銀公民館と連携を保ち、継続して教育活動にご協力をいただいていることで、子どもたちの学習に大きな成果を挙げています。特に、国語における毛筆指導ではレベルの高い指導、また、総合的な学習の時間における地域学習では“水くみ体験”などの白銀地区独自の生活文化の継承が展開されています。

毛筆指導のボランティアの方々はいずれも全国規模の作品展に出品し、入賞経験のある“師範級”ですが、子どもたちのやる気に触発され、自分たちの作品作りにも良い影響を受けているそうです。

このような活動です（国語・毛筆指導）

（きっかけ～現在の状況）

平成12年度当時の校長先生より、毛筆セットが活用できているかという疑問が提示されました。そこで、指導の質と量の両面の充実を図るために、白銀公民館に声をかけたことが最初のきっかけだったようです。

今年度は年間70日ほど、一日につき4～5人がボランティアで指導にきてくれます。

（ボランティアの方々との授業形態）

毛筆の指導は、基本的に教務主任が担当しています。そこで、教務主任は授業者T1となり、ボランティアの方々にはT2としてアシストしてもらい、学級担任はT3として個別支援にあたることが多いようです。ですから、一回の授業で、教室には7人ぐらいの大人が一気に指導にあたることになるそうです。T1の先生は、その立場上、師範級のボランティアの方々を前にして、冷や汗をかきながら子どもたちにお手本を示していると話されていました。

また、1月には全校書き初め大会も行っています。白銀公民館を会場に、毛布大の下敷きなども借用し、指導もこのボランティアの方々から全面的な協力を得て実施しているそうです。

書き初め大会は2日間にわたって行われ、初日の前半部分は3年生、後半が5年生の割り当てです。2日目の前半は4年生、後半は6年生となっています。およそ1時間くらい清書をし、後半の学年が後始末をします。12人ものボランティアの指導の方々が協力してくださっています。

(ボランティアの方々の動き)

ボランティアの方々は、学校に来ると来校者名簿に記名し、待機場所となっている図書室内の畳スペースで待機します。12畳ほどのこのスペースには、小さな机とストーブ、湯茶セット、テレビが備えてあり、ボランティアの方々はここで授業の始まりを待つということです。湯茶のセットの準備や片付けは、毛筆指導の主担当であるT1教務主任の先生ということでした。職員室や校長室に入って型どおりの挨拶をすることもなく、自然に来校して、自然に帰っていく・・・そんな家族のような信頼関係があるようです。

(学習の成果)

ボランティアの方々は、授業が始まる5分前には教室の後ろに待機してくださり、その指導への熱意が子どもたちにもよい影響を与えています。

各教室の後ろの壁面には、どの教室にも子どもたちの毛筆作品が展示されています。どの教室に行っても、子どもたち一人一人に細やかな指導が行き渡っていることが実感されます。

昨年度と今年度、読売新聞社の青森県小・中学校書写紙上展で、学校賞を2年連続で受賞することができました。師範級のボランティアの方々からの専門的な指導内容にふれることにより、学校の先生方の指導技術の向上にもつながっているということです。

(ボランティアの方々の感想)

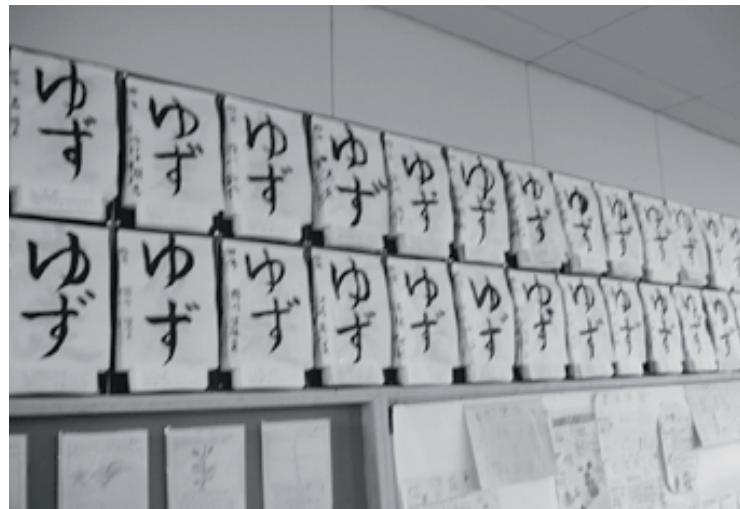
ボランティアの方々とは、毎学期1回、食事を取りながら学校教職員と情報交換をしています。

そこで、ボランティアの方々からは、こんな感想をいただいているそうです。

「学校へ元気をもらいに来ている。」

「子どもたちが書道を好きになってくれてうれしい。」

「子どもたちのもっと書きたいという気持ちが、自分たちの創作意欲にもつながっている。」



このような活動です（総合的な学習の時間）

（沖揚音頭・沖揚勇太鼓）

前述したように、白銀地区は、湊地区・鮫地区と並んで八戸の水産業を支える基盤の町であり、昔から漁業と深い縁を持っている町です。この漁業に従事していた方々が気持ちと一緒にしたり調子を合わせたりするための沖揚音頭・沖揚勇太鼓を、ひとつの芸能として高めた方がいます。その方に子どもたちへの指導を依頼しています。

学習発表会での発表はもちろん、そのボランティアの先生の生き方や姿勢に共感するなど、子どもたちによい影響が与えられているそうです。

（水くみ体験学習）

白銀地区は、元来、砂地で坂も多いことから、昔の方は飲料水の確保に大変苦労されていました。近くに湧き水が流れる「清水川」という場所あり、そこを白銀地区の方はとても大切にしてきたそうです。白銀小学校では、地域学習としてそこから実際に水を汲み、天秤棒を担いで水を運んだ昔の暮らしのスタイルを、ボランティアの方々と一緒に体験しているということです。

（その他の学習活動）

とうふ作り体験・いかめし作り・するめづくりなどにも地域の方々がご指導くださいます。

このような学習活動への地域の方々の協力は毎年のことであるため、ボランティアの方々は連絡があるのを待っているような状態であるということです。ですから特に打ち合わせが要らないばかりでなく、昨年の反省を踏まえ、今年度はこういう風にしようと改善案を持っているほど積極的であるということでした。

これは、長く続けてきた、積み上げてきた結果ではないか・・・と、教頭先生より感想を話していただきました。

「ある意味で、人材リストはいらないような状況になっています。学校に来ることが当たり前のようになっていて、電話1本で日程の打ち合わせをするだけでいい・・・人材リストは、子どもたちのお礼の場である“ありがとう集会”へご招待するためのリストです。」

ありがとう集会（2月）

上記のほかにも、特別活動のクラブ活動として設置されている、バドミントンクラブ・グランドゴルフクラブ・お茶生け花クラブでも、地域の方々から指導の支援を受けています。

このようなたくさんの地域の方へのお礼が、学年ごとにまちまちであれば、ボランティアの方々も困るのではないかという思いから、一緒にご招待して感謝の気持ちを伝える会を開催しようということになったそうです。そして、この会はまた、子どもたちが身についた技術や知識の発表の機会もあり、沖揚音頭・沖揚勇太鼓が披露され、書き初めの作品も展示されます。

以前、お世話をした地域の方々を招待したところ、180人を招待することになった年



度もあったそうです。

ここが聞きたい お答えします

Q： 学校で困っていることはありませんか。

A： このような支援を受けながらの授業を継続すると、学校サイドの都合だけで授業内容を変更したり削除したりできにくくなります。ボランティアの方々は、「今年、この段取りがまずかったから、来年度はこうしよう・・。」なんてことを考えてくださっています。そんな中、声がかからないということになると関係が気まずくなるかもしれません。

特に新学習指導要領の改訂に伴って、総合的な学習の時間の指導時間数が削減になり、年間計画の見直しを進めなければなりません。その際に、残すものや合体するものなど、今までの信頼関係を保ちながら変更する難しさを感じています。

Q： ボランティアの方々から不満を聞いたことはありませんか。

A： 現在のところ、聞こえてきてはいません。しかし、長い間継続して取り組んできていることから、このような学校支援ボランティアに意義を見出せなかつた方やおもしろくないと感じた方は、この学校支援ボランティアから抜け、来なくなってきたのではないかと感じています。現在は、学校支援ボランティアに価値を見出している方がいらっしゃっているのではないかと感じています。

Q： 今後こうしたいと思う事はありませんか。

A： ボランティアの方々へのお礼としては、子どもたちの笑顔が一番だとは思うが、形にして御礼を差し上げたい。せめて、ボランティアの方々への保険代くらいはなんとかしたいと考えています。

この活動を行って 成果・課題、そしてこれから

白銀小学校では、上述した毛筆指導・総合的な学習の時間の指導・クラブ活動の指導以外にも、登下校時の安全指導・学校周辺の草刈・防球ネットの補修・図書の読み聞かせ・図書資料の整理・砂場補修・庭木剪定など、多くの面で地域の方々から支援を受けているそうです。

地域にも回覧している学校だよりに掲載されている児童が、地域の方から声をかけられ、ほめられたということも耳にしたそうです。

教頭先生は、子どもたちは、白銀に住んでいる方とふれあいを深め、白銀の街を好きになっているのではないかという感想をお話して下さいました。そして、最後にこう話されました。

「将来は自分がボランティアとして学校のために役に立とう、そして、お世話になった白銀の街のために役に立つ大人になろう・・・そんな子どもたちに育ってほしいと思います。」



三八地区

クラブ活動を通じて地域とつながる

～ボランティアの報酬は「感動」～

教育ボランティア運営委員会を体制の
基礎として、学校のクラブ活動を継続して支援



この取組を紹介したわけ

八戸市立田面木小学校は、八戸市の西部に位置する地域にあり、全校児童300人ほどの学校です。東北本線八戸駅に近い地域であり、古い歴史と伝統のある地域でもあります。地区公民館と隣接しているという恵まれた立地条件を生かし、10年ほど前から学区に居住している方々を招いて支援を受けています。特にクラブ活動の指導においては、全クラブ11のうち7つのクラブ活動で年間を通じた継続的な指導支援を受けています。

これらの体制の基盤は、学校独自に開催している「教育ボランティア運営委員会」であり、この委員会を通じてボランティアの方々との連携を図っています。ボランティア活動が始まる際には、ボランティアの方々が直接教室に赴くなど、気負いのない自然な雰囲気でのボランティア活動を行っています。

このような活動です

(運営委員会の概要)

第1回教育ボランティア運営委員会は、4月に開催され、組織や年間計画が決定されます。その後、クラブ活動の授業が継続的に行われます。

1月に第2回教育ボランティア運営委員会が開かれ、反省とともに来年度への引継ぎ事項が確認されます。その結果が学校で検討され翌年度の教育課程編成会議に生かされます。

(第1回教育ボランティア委員会～第1回クラブ活動へ)

第1回目の教育ボランティア運営委員会の開催期日は4月下旬の平日です。14時20分～15時までの40分間です。学校の教職員も全員参加し、その場で教育ボランティアの方々と担当教員が顔合わせを行い、年間のスケジュールを決定します。教育ボランティア運営委員会では、委嘱状交付などはありません。

また、その日は第一回目のクラブ活動の開催日



ですので、体育館で4年生以上の全児童に紹介したあと、すぐにクラブ活動が始まります。

クラブの活動は、単位授業あたり75分間の授業時間が設定されています。これは、ボランティアの方々の指導時間を十分確保するための配慮です。

平成20年度は、ユニホッククラブ・茶道クラブ・大正琴クラブ・点字ボランティアクラブ・郷土芸能クラブ・菱ざしクラブ・英会話クラブでボランティアの方々が活躍しています。大正琴クラブが使用する楽器は、クラブ全員が練習できるよう、すべてボランティアの方々が寄付してくださったそうです。また、時間を見つけて弦の調整にも来て下さっているとのことです。



(クラブボランティアと一般ボランティア)

教育ボランティア運営委員会には、地域の婦人会、老人クラブ、お茶の会、菱ざしクラブなど各団体の方をはじめとして、個人の方を含め30名くらいの方々が集います。その方々を区分けすると、「クラブボランティア」と「一般ボランティア」になります。「クラブボランティア」の方々は、上述のような方々ですが、「一般ボランティア」の方々は、総合的な学習の時間や生活科で、田面木音頭や菊花栽培・ヨモギ餅づくり・英会話などの指導にあたってくださっています。

(学年毎にお願いする一般ボランティア)

各教科や総合的な学習の時間の中で協力いただくボランティアの方々との連絡は、基本的に該当学年の担当教員が行います。



2学年の生活科の授業の一環として行われているヨモギ餅作りは、婦人会の方々から毎年協力していただいておりますが、2年生への指導のほかに全校児童のために数百個のヨモギ餅を作り、ひとりひとりに配ってくれます。

校長先生は、「子どもたちが大きくなったとき、このような思い出が大きな励みとなり、地域を大切にしようとする心や勇気を与えてくれると思う。」という感想をお持ちでした。



このように進めています

○クラブ活動にいらっしゃるボランティアの方々の動き

4月の教育ボランティア運営委員会で決定された計画に基づいて、クラブ活動開催の期日・

時間が近づくと、クラブボランティアの方々は、自家用車で、あるいは徒歩で適宜来校します。

まず、玄関で、一般来校者と同様に、来校者名簿に自分の氏名を記入します。首から下げるペンダント式のご自分の名前の入った「教育ボランティア〇〇〇〇」の名札が既に配布されているので、この名札をつけます。ですから玄関にある来校者用名札は手にとりません。

各自玄関からスリッパを借用して、各クラブ活動の教室に向かいます。その際、職員室に立ち寄ったり校長室にうかがって挨拶をしたりすることはありません。

クラブ活動が終わると、それぞれ持ち寄った教材を片付け、そして、玄関に向かいます。校長室に立ち寄って歓談するとかお休みになるとか、そのような特別な待遇はありません。まっすぐ玄関に向かい、来校者名簿に退下時刻を記入して帰宅します。教頭先生は、できるだけ廊下や玄関に出てお迎えをしたりお礼とお見送りをしたりするように心がけているということですが、あまりにも自然で気負いのない雰囲気に圧倒されるほどです。



○ボランティアの報酬は「感動」

6学年児童56人の菊花栽培の指導にあたっているTさんは、子どもたちの指導はもちろんのこと、見えないところで菊花の世話をしてくれています。それは、命の教育の一環として教育課程上の位置づけではあるものの、菊花栽培は子どもたちだけではできない部分が多くあり、その部分はTさんが毎日作業してくださっています。

子どもたちは、Tさんに感謝のお手紙を出しています。道で会ったときや作業をしているときに、「Tさん、こんにちは」と名前を呼んで子どもたちから挨拶されることをとても嬉しく感じています。このことが、自分のボランティア活動の大きな励みになっています。



Tさんは、「子どもたちから多くを学び、感性を受け取っている。ボランティアの報酬は、感動である。」と話されているそうです。また、8年間にわたり菱ざしクラブの指導にあたっているボランティアの方は「子どもたちからパワーをもらっている。」と話していました。

○学校支援ボランティアのきっかけ

平成6年度ごろに、青森県環境教育モデル校に指定され、研究を進める中で当時の校長先生が地域の方々を招いて授業を行うことに積極的に取り組んだことがきっかけでした。そして、さらに数年後120周年記念式典をむかえるにあたり、子どもたち自身で育てた花で会場を飾りたいという想いから、指導者として地域の方を招聘し、観賞用菊花（奥州菊）栽培

を始めました。これは式典に参加した多くの方に感動を与えることとなり、以後につながる大きな出来事になったようです。

ここが聞きたい お答えします

Q： ボランティアの方々に対するお礼などは、どのようにしているのでしょうか。

A： とりたてて謝金などのお礼はしていません。Tさんがおっしゃってくださるように、子どもたちとのふれあいを一番のお礼として受け止めてくださっていると感じています。運動会・音楽会はもちろんのこと、卒業式などの学校行事には、ご来賓としてお招きしています。ですから、当日の来賓席は、たくさんの方々で埋まります。

Q： 子どもたちは、どんな受けとめ方をしているのでしょうか。

A： 子どもたちが書く作文には、教育ボランティアの方々にお世話になったことがよく記されています。それだけ、子どもたちには「感謝」の心が染み入っているのだと思います。この学校に赴任してきた教職員は、全校の児童が大きな声で「よろしくお願いします。」と気持ちの良い挨拶が自然にできることを不思議に感じます。でも、このような教育ボランティアの方々とのふれあいによって育まれたものであることをすぐに理解します。外部の方々との関わりにはこんな成果もあるのです。

Q： 地域の方を招聘した授業を計画する際に配慮していることはありますか。

A： 活動時間が少ないと、外部講師の方が児童の活動に手助けすることが多くなります。結果的に子ども自身の活動が少なくなり、教育効果も薄れるという心配があるので、活動時間を十分とることに留意しています。もちろん他教科の指導時間を圧迫しないような配慮はしています。

この活動を行って 成果・課題、そしてこれから

地域を巻き込んだ学校教育活動を・・と奨励する声が良く聞かれますが、田面木小学校ではすでに行われています。先生方も子どもたちと一緒にクラブ活動の時間に大正琴を習うなど、教職員の間にも全く抵抗感はありません。

「田面木地区の文化を守ろう」そんな意識を子どもたちは受け止め、地域の多くの方々に見守られながら自信をもって取り組んでいます。子どもたちは、クラブ活動で学んだことを地域の発表会で披露したり出品したりもしています。田面木地区の方々は、地域の宝である子どもたちに地域の文化を伝えることが嬉しいのです。

今後は、児童の興味関心を大切にしながら柔軟性のあるクラブ編成を工夫したり、教科指導・学習面でのサポートへの広がりを意識したりしていきたいとのことでした。

最後に、校長先生の言葉です。

「子どもは、ほったらかしにすると伸びない。関わってもらうと伸びる。」



三八地区

初年度の取組の実際

～スタートから今後の展望まで～

学校から発信されたニーズへの 取組による第一歩



南部町立福田小学校

この取組を紹介したわけ

学校支援ボランティア活動の活発な学校・地域は、ここ数年で一気に花が咲いたものではなく、何年にも渡り少しずつ少しずつ種を蒔き、水を与えて大切に育んできた学校と地域の関係づくりをよりどころにした事例が多くみられます。

そこで、ここでは、正に今年度から実質的にスタートした学校の事例として福田小学校をご紹介したいと思います。

全校児童数203名、学級数8の福田小学校は、八戸市の西に隣接する南部町にあります。南部町は、平成18年より旧南部町と旧名川町と旧福地村が合併して誕生した新町であり、福田小学校は旧福地村に位置しています。20数年前に星岡小学校・塙渡小学校と合併した学校であることから、古くからの地域も学区に抱えながら、反面、あかね団地という分譲地も抱えていることで、新しく転居されてきた方も比較的多い学区です。

今まででは、総合的な学習の時間の指導や読み聞かせの方々から支援を受けてきたことはありますですが、今年度より地域本部事業を受け、本格的に学校支援ボランティア活動の取組やコーディネーターの設置などを始めた当校の第一歩の様子をご紹介します。

このような活動です（取り組むきっかけ）

（教育委員会施策より）

上述したように南部町は、旧3自治体が合併して誕生した新町ですが、その中の旧名川町では、平成10年度より学社融合事業として、地域の方々を学校の教育活動に派遣する事業を実施していました。小学校のクラブ活動をはじめ、中学校の選択講座などの授業に地域の方々を派遣する町の社会教育としての事業で、旧名川町内の学校では継続して活用していました。

新南部町が誕生するにあたり、社会教育施策として、この学社融合事業を新町内全域の小中学校に普及することが掲げられたようです。



名川
県教委交じえ学社会議

新南部町が誕生するにあたり、社会教育施策として、この学社融合事業を新町内全域の小中学校に普及することが掲げられたようです。

学校支援本部事業は、まさに、この学社融合事業にマッチしたものでした。町の社会教育行政の施策としても、ぜひ町内の全学校でこの事業を展開したいという思いがかったようです。

(学校の現況：読み聞かせボランティア)

平成10年度ごろ、PTAのOBであるTさんから学校に直接、読み聞かせ活動をしたいという打診がありました。本人からの売り込みという形です。ちょうど、学校では、子どもたちに外遊びを奨励するため、週に一日、水曜日だけは全校清掃時間をカットし、給食後の昼休み時間から全校清掃時間まで、50分間の長い昼休み時間を設けていました。この時間を利用することで、十分な読み聞かせができるものと考え、お願いすることにしました。Tさんはお仕事をお持ちであることから、水曜日と限定されたことで、結局1ヶ月に1回程度の読み聞かせしか設定できませんでしたが、それでもその日は、給食時の放送を使って子どもたちに読み聞かせがあることを周知するなど学校でも参加奨励を図りました。Tさんは、たったおひとりで読み聞かせを行い、時にはパネルシアターなどもご披露して下さいました。低学年の児童を中心に常時30人ほど熱心に聞いていたということです。

数年度は、さらにステップアップし、Tさんの都合にあう平日の朝、8:00～8:10分までの朝自習の時間に、ひとつの学級で読み聞かせをするということも行いました。学年の発達段階に応じた本、高学年の児童が興味を示す本の選択などにも気を配ってくださいました。(その時は、「嵐の夜に」が流行していたそうです。)

そして、さらに、PTAのお母さん方に声をかけ、賛同した方々と読み聞かせサークルを結成し、お仲間と共に読み聞かせ活動も行い、現在に至っているそうです。



また、一方、平成10年度ごろから、ある中学年の総合的な学習の時間でりんごの栽培体験を通じた学習計画を作成し、その学年のPTAだったHさんから年間を通じて協力を得ることになりました。この受粉作業～収穫までの一連の貴重な学習に、一年間通じて協力を得たことがきっかけとなり、これまでの10年間継続して協力を得ているそうです。



三八地区

(学校支援地域本部事業の最初の印象)

学校支援地域本部事業について、南部町教育委員会社会教育課の職員が学校に説明した時期は、平成19年度末でした。

そのとき、この事業について教頭先生には、「けっして悪い事業ではない」「うまく機能すると大変有効だろう」という期待とともに、「本校では特に問題はないのに、どのようにボランティアを受け入れていけばよいのか」「学校の、どの場面でどう活用できるか十分考慮しなければならない。」という不安もあったようです。

つまり、PTAの活動の様子を含めた福田小学校の実態から、必要性を考えたときに、積極的に事業を活用しようとする意識を持てなかつたそうです。

このように進めています（最初の取組）

平成20年度がスタートしてからも、結局、協議会の設置やコーディネーターの都合等により、本格的に動き出したのが9月に入ってからでした。

福田小学校では、10月下旬に学芸会を開催しますが、その中で例年プログラムの最後に全校群読を行ってきました。今年度は、それを変更し、全校合唱にするという企画が持ち上がりました。その際に職員間で問題になったのが、子どもたちが歌っている顔の表情をしっかり見せるために、全校児童が立つ“ひな壇”的数が足りないということでした。

この話が教頭先生からコーディネーターのKさんに連絡され、Kさんがこのひな壇の作成を最初にコーディネートすることになったそうです。

具体的には、教頭先生がステージの幅に応じた寸法を測定し、地域の木工職にパーツの作成を依頼する・・・Kさんは、そのパーツを組み立てるボランティアの募集や当日の用具等の準備を行いました。



作成日は、10月12日（日）です。場所は福田小学校体育館。全部で10名の方が集まりました。体育館の鍵の開閉は、学区内にお住まいの教職員が行い、あとは、集まった方々で行ったそうです。幅180cm×奥行き60cm×高さ30cmの踏み段が10ヶ、さらに同じ大きさで高さ60cmの踏み段が10ヶ、全部で20ヶの作成です。

子どもたちが乗っても安全なもの・・・運搬がしやすく・・・もし同じ数だけ既製品を購入しようとすると、たぶん20万円は下らないでしょうが、原材料費6万円だけで済んだということでした。

学習会当日、子どもたちはこれを使用して立派な合唱を見せてくれたそうです。そして、さらに校長先生は、ご挨拶の中でこのひな壇を作ってくださったボランティアの方々の、おひとりおひとりのお名前を丁寧にご紹介してくださいました。

これから取り組まなければならないこと

教頭は、これから至急取り組まなければならないこととして、学級担任とする職員全員に、この事業の趣旨を周知徹底する、ということです。

上述のひな壇のように、学校の中にはこのボランティアを活用したほうが、教職員だけのときよりずっと有効に働く場面がある、その場面や場所を探し出すこと、そして、支援が入った方がいいと思われるアイディアを募る必要があると言います。

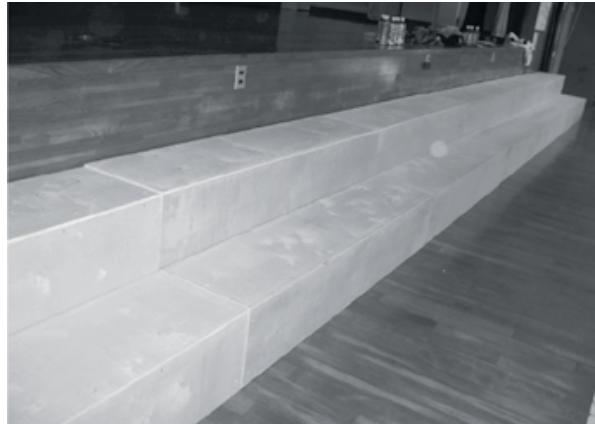
現在、学校全体のニーズとして、包丁とぎや鎌とぎ、低学年児童の下校時の安全指導、生活科等の校外行事での安全指導が挙げられているそうですが、さらに、日常的に子どもたちに直接指導している担任だからこそ感じる支援内容を掘り起こすためにも、まず、全職員への事業の周知徹底を図っていきたいと話されていました。

この活動を行って 成果・課題、そしてこれから

実は、福田小学校のコーディネーターのKさんは、福田小学校のPTA会長をされている方でもあります。このことは、福田小学校にとって大変都合のよい条件であり、絶好のチャンスとなっているようです。

教頭は、この数ヶ月間という短い時間ではあるものの、コーディネーターの存在の大きさを実感し、このように話されました。

「今まででは、地域の方に依頼することが大変だった。その壁がなくなった。コーディネーターに話すと動いてくれる。話を聞いてくれる。本当にいい。」



三八地区

中学校での図書支援ボランティア

～無理なく、好きな時間に、やれることを～

学校のニーズから始まった 自由度の高い支援体制



八戸市立東中学校

この取組を紹介したわけ

八戸市立東中学校は、生徒数498名、八戸市の東側の湊高台地区の新興住宅地を主な学区とし、今年度創立20周年を迎えた新しい中学校です。この湊高台地区は、国道45号線の幹線道路に近い市の高台に位置し、校舎3階の窓からは青い太平洋を望むことができます。

八戸市では、市内の小中学校の図書資料すべてをデータベース化する業務に計画的に取り組んできました。図書支援員などを学校に派遣することでデータベース化を進めてきましたが、昨年度末で、この派遣事業が終了となることを受け、担当者の発案により、図書ボランティアの募集を始めました。

活動を始めて3年目となる今年度は、ボランティアの方々から提案されたアイディアが図書室の運営に生かされています。ボランティアの皆さんのが、楽しく、無理なく、好きな時間に行っている、とてもステキな活動の様子をご紹介します。

このような活動です

○取り組むきっかけ

八戸市教育委員会では、市内の全小中学校の図書資料のバーコード管理を行うため、図書支援員を配置しました。図書支援員は、新規購入した図書資料はもちろんのこと、蔵書のすべてにバーコードを付け、コンピュータ登録するという業務に従事しました。東中学校にも、この図書支援員が配置されていましたが、この支援員の配置制度は、平成18年度末で終了になる予定でしたので、東中学校の図書担当教員が、この支援体制をなんとか維持したいと考えました。担当の国語科のS先生は、平成17年度～18年度にかけて、東日本学校図書館フォーラムをはじめ、さまざまな大会や研修会に参加する機会が多かったようです。その際に事例としてよく耳にしたのが、“学校だけでは対応できない”ということでした。



また、折りしもその時期に東中学校では、朝の読書活動の時間を設定することになったため、図書室を充実する必要もありました。学区内にあるM小学校では、すでに図書支援ボラ

ンティア活動が行われていたことから、S先生はM小学校の様子を直接お聞きし、資料をいただきながら、準備を進めていったそうです。

○ボランティア募集

平成18年12月に最初の募集を、保護者対象に行いました。その結果、合計6名の方から協力をいただきました。5名が保護者の方で、1名が在籍している生徒の祖父でした。毎月1回ぐらいの活動をお願いしました。市教育委員会から派遣されていた図書支援員の方から、パソコンの使い方をはじめ、図書支援活動としてどんなことをすればいいのかという研修会も開催したそうです。

半年ほど、この6名で活動してきたようですが、保護者よりまたボランティアを募ってみたらどうかと提案され、東中学校のS先生は2回目の募集を全保護者を対象に行いました。その結果、さらに10名ほどのボランティアの申し出があったそうです。

夏期休業中には、市教育委員会の指導主事を講師に迎え、独自にボランティア講習会を開催することも行いました。

平成20年4月に再度募集し、現在18名の方々が登録されております。



○学校図書館協力員

八戸市教育委員会で各学校に派遣してきた図書支援員事業は、前述したように平成18年度末で事業としては終了しましたが、市内8校だけが指定校として、引き続き学校図書館協力員を派遣することになったそうです。

東中学校はこの指定を受け、S Eさんは派遣を受けることになりました。このS Eさんは、ボランティアの方々と一緒に活動をしてきました。学校図書館協力員は、八戸市教育センターの非常勤職員として、全部で8名が所属し、それぞれ指定された学校に配置されています。S Eさんは、東中学校を担当する学校図書館協力員として活躍しています。

ボランティアの方はこのS Eさんに対してこう述べています。

「最初のころは、ホワイトボードに作業内容を記入してくれるなど、とてもわかりやすく教えてくれました。ボランティアの方々が、活動しやすいように、そして入りやすいように体制をつくってくれたことが嬉しかったです。」



三八地区

このように進めています

○ボランティアの方々の動き

東中学校の図書担当教員のS先生が、その月の活動日をボランティアの方々に連絡します。たとえば、11月であれば、11日・18日・20日・25日・27日の5日で、時間はいずれも10:00～14:30です。

ボランティアの方々は、その示された活動日から自分の都合のよい日と時間をS先生に返答します。

S先生は、この返答を一覧表にして再度ボランティアの方々に配布します。

当日、ボランティアの方は、おひとりおひとり各自学校に来て、まず職員室に声をかけます。ネームプレートをつけ、図書室に向かいます。

帰る際も、一応職員室に声をかけてから帰るそうです。

活動中は、東中学校の担当のS先生は、もちろん授業がありますが、時間の許す限り図書室に来て声をかけているということでした。

○ボランティアの方々の工夫

図書室の図書整備等の活動をしていくうちに、ボランティアの方々から、様々なアイディアが出るようになりました。

本のカバーを切り抜くという技もボランティアの方からの提案でした。本のカバーは、色鮮やかに工夫され、読者をひきつけるように作られていますが、本の本体から外れたときのことを考えると、バーコードをカバーには貼り付けることはできません。しかし、バーコードの読み取り機で、本の貸借業務を行うときに、いちいちカバーをめくることも手間がかかります。



そこで、本の本体に添付したバーコードが見えるように、バーコードと同じ大きさでカバーに穴をあけることが提案されました。その空いた穴には、半透明のシールを張り、パソコンの読み取り機でも読み取れるようにします。その穴は、まるでカバーにある窓のようです。さらに、その窓を切り抜きやすいように、厚紙で型を作り、その型紙に添ってカッターを動かすことで、決まった大きさの窓が簡単に開けられるように工夫したそうです。



また、本棚に埃がたまることを防ぐため、本を押し込んでも本棚の前の部分に本が並ぶよう、本の後ろに使い終わったペットボトルやティッシュの空き箱などを並べています。

本の紹介コーナーでは、短いコメントとともに陳列しています。このコメントもボランティアの方が、自主的に書き綴ったものです。

新刊図書の購入については、お金に関わることなのでボランティアの方々に一任するわけにはいかないものの、推薦図書の選定などにもボランティアの方々の意見を取り入れているということでした。

このように、パソコンの得意な方は、バーコードの添付やパソコンへの登録などを行い、苦手な方は、このような本の紹介や図書の整理などを行っているそうです。

○ボランティアの方々の声

「以前、図書室の貸し出し体制ができないので、5月になっても本の貸し出しができないという状況がありました。先生方が忙しいからできなかったのですが、少しでも子ども

たちの読書に役立てて嬉しく思っています。」
「活動は楽しいです。中学生が読む本の種類がわかります。」
「家に帰ってから、子どもと会話ができます。」
「自分にとって気分転換になっています。」
「なかなか学校に来る機会が多くないので、学校に来て掲示物をみたり、自分の子どものうしろ姿をみたりすることが楽しいです。」
「学年を超えて、保護者として情報交換もできます。受験情報とか。」
「本が好きなので、借りて行って読んでいます。」

ここが聞きたい お答えします

Q： 担当者として、どんなことに気をつけていますか。

A： ボランティアの方々が、窮屈に感じないようにすることです。そして、何か仕事をやってもらうことで、役に立ってもらうようにすることです。

Q： ボランティアの方々によって、改善できた点は。

A： 担当者としての負担は大幅に軽減されました。今まででは、本を読ませたくても、準備ができないという状況でしたから。

Q： お礼の方法は。

A： 特にしていません。ただ、3月にお疲れ様会を設けて、お茶とケーキを食べて一緒におしゃべりをしています。

Q： 生徒たちの抵抗感はありませんか。

A： ボランティアさんがいることが普通になっています。図書室で普通に授業もしています。

Q： 今後の課題はどんなことですか。

A： 担当や管理職が異動になったことで、ボランティア活動ができなくなった事例も耳にしていますので、学校図書館協力員のS Eさんや自分が異動になったとき、しっかり引き継ぎをしたいと思います。

この活動を行って 成果・課題、そしてこれから

最後にボランティアの方々からの感想です。

「こういう活動は、学校側の受け入れる姿勢で違ったものになると思います。学校が受け入れないとこんなにできません。ボランティアを受け入れる体制が一番大切だと思います。」

「自分で事前にスケジュールを書き込むなど、制限がないのがいいです。無理なく、好きな時間にやれることで、続けられていると思います。みんなと会えてコミュニケーションを取れるのが楽しいです。」



三八地区